

# 1 美唄市の歴史

## (1) 北海道の歴史『炭鉱（やま）の記憶』

### ■北海道の炭鉱の始まり

#### ○近代石炭生産の前史

北海道の石炭生産は、幕末の1860年前後に始まりました。

そのきっかけとなったのは、1853(嘉永6)年のペリー提督の黒船来航及び1854(嘉永7)年に江戸幕府とアメリカで締結された日米和親条約です。

同条約によって、下田（現静岡県下田市）とともに箱館（1869(明治2)年「函館」に改称）が補給港として開港し、1639(寛永16)年以来200年にわたって続いてきた鎖国体制が終わりを告げました。

日米和親条約と同じ年に日英和親条約、1855(安政元)年に日露和親条約、1858(安政5)年にはアメリカをはじめとする英仏露蘭5カ国との間で修好通商条約（安政五カ国条約）が締結されました。

これによって箱館は、横浜・長崎・新潟・神戸とともに国際貿易港となり、外国人居留地が形成されました。

このような外国貿易港としての箱館開港を契機として、船舶への燃料供給の必要性が高まりました。当初は、箱館周辺の木材を薪として供給していましたが次第に間に合わなくなり、江戸幕府によって、1857(安政4)年に白糠炭山（釧路管内白糠町）、1862(文久2)年には茅沼炭山（後志管内泊村）が開発されました。しかし、これら炭鉱の生産は技術的にも未熟で、炭層の質・量の点からも限界がありました。

#### ○近代炭鉱の成立

1868(明治元)年から1869(明治2)年にかけて、幕府勢力の最後の抵抗であった箱館戦争が終結し、明治政府が成立しました。そして、1869(明治2)年7月に開拓使が設置され、欧米列強に対抗するために北海道のある天然資源の開発が必要となり、次第に北海道の開拓が政府の重要課題となっていきました。

そのような中で、北海道内陸部における開発の先兵として期待されたのが、お雇い外国人の地質学者ライマン（ベンジャミン・スミス・ライマン 1835～1920）の調査によって明らかにされた豊富に埋蔵する石炭でした。ライマンは、1872(明治5)年から1881(明治14)年の間、日本に滞在し調査を行っていました。

近代炭鉱開発のスタートとなったのは、1879(明治12)年開鉱の官営幌内炭鉱（三笠市）です。開鉱前の1875(明治8)年～1876(明治9)年に、黒田清隆・伊藤博文・山県有朋ら政府要人が次々と幌内を訪れ、また石炭運搬のための幌内鉄道（小樽市手宮～三笠市幌内）が全国3番目の鉄道として1882(明治15)年に全線開通（1880(手宮～札幌間が部分開通）したことからわかるように、幌内炭鉱の開発は国家プロジェクトだったのです。

1889(明治22)年、幌内炭鉱は、開拓使の役人であった堀基（ほり もと）が設立した北海道炭礦鉄道（北炭、後の北海道炭礦汽船）に払い下げられました。同社によって1890(明治23)年に空知炭鉱（歌志内市）、夕張炭鉱（夕張市）の開発が行われ、1892(明治25)年には、岩見沢市から室蘭市への鉄道延伸が図られました。

## ■新鉱開発による石炭産業の活況

### ○鉄道国有化による新鉱開発の拡大

1906(明治39)年に鉄道が国有化され、北炭による優良鉱区と鉄道輸送の独占体制が崩れました。これを契機に、財閥系企業を中心とした北海道進出が活発化し、石狩炭田のみならず釧路炭田や留萌炭田でも新鉱開発が相次ぎました。

この時期に空知に開鉱した代表的な炭鉱として、三井鉱山登川(夕張市に開鉱され、1911(明治44)年に買収、1919(大正8)年北炭に譲渡)、三井鉱山砂川(1915(大正4)年上砂川町に開鉱)、三菱鉱業美唄(1915(大正4)年に買収)、三菱鉱業大夕張(1916(大正5)年に買収)、住友石炭鉱業唐松(三笠市に開鉱され、1916(大正5)年に買収)、山下汽船歌志内(1916(大正5)年歌志内市に開鉱、1928(昭和3)年に住友石炭が買収)、大倉鉱業茂尻(1918(大正7)年赤平市に開鉱、1935(昭和10)年に雄別炭礦が買収)などがあります。

その頃北炭は、鉄道買収資金を輪西製鉄所につぎ込んでいましたが、銑鉄生産の要である高炉に莫大な資金を必要としたうえ、原料の鉄を噴火湾沿岸で採れる砂鉄にこだわったため、技術的な問題から十分に操業ができない状況が続いていました。

さらに、折からの不況で需要が低迷していた1912(明治45)年に、北炭夕張鉱で二度にわたる大事故(それぞれ死者267名、216名)が発生し、製鉄所へ資金が集中していた北炭は、一挙に苦境に陥りました。

その機に乗じて、それまで北炭に資金を貸し出していた三井財閥は、北海道で優良な鉱区を独占していた北炭を系列下に収め、1913(大正2)年に北炭会長として団琢磨(三井鉱山会長、三池炭鉱を近代炭鉱に成長させた技術者、その後三井合名理事長となったが1932(昭和7)年に血盟団事件で暗殺された)を送り込みました。

これにより、北海道での石炭生産の基盤を作った三井は、1915(大正4)年に樺太に三井系の王子製紙を進出させ、三井鉱山で産出した石炭を王子製紙へのボイラー炭として供給します。

その後、樺太は三井主導で開発が活発化し、その中継港として小樽港が大活況を呈しました。1923(大正12)年には、港湾機能拡充のため小樽運河が完成しました。

### ○戦争による活況

北海道の石炭生産は、世界恐慌(1929(昭和4)年)の影響で足踏みを続けていましたが、次第に戦時経済色が強くなる1931(昭和6)年の満州事変以降は、軍備拡張に乗って石炭市況は一気に活性化したため新鉱開発が相次ぎました。

- この時期に開発された炭鉱として、北炭平和(1939(昭和14)年夕張市に開鉱)、北炭赤間(1936(昭和11)年赤平市に開鉱)、北炭天塩(1936(昭和11)年小平町に開鉱)、三井鉱山芦別(1939(昭和14)年に芦別市に開鉱)、住友赤平(1938(昭和13)年赤平市に開鉱)、明治鉱業庶路(1940(昭和15)年白糠町に開鉱)などがあります。

- 独立系の炭鉱では、日本鋼管系の新幌内（1934(昭和9)年三笠市に開鉱、1941(昭和16)年北炭に併合）、鈴木商店系の羽幌（1940(昭和15)年羽幌町に開鉱）などがあります。

これら旺盛な新鉱開発と既存炭鉱の生産増強によって、戦時期の1940(昭和15)年～1944(昭和19)年には、全道の石炭生産量は、一時的に約1500万トンに達しました。

## ■戦後から石炭産業の終焉まで

### ○戦後復興期

太平洋戦争終結後は、無理な採炭の反動で生産量は低迷し、1946(昭和21)年には最盛期の3分の1である500万トン台にまで落ち込み、鉄道輸送や産業復興に必要な石炭不足が深刻な問題となりました。

当時、わが国唯一のエネルギー資源であった石炭なしには戦後復興はあり得ないことから、1946(昭和21)年に石炭産業へ優先的に資源を投入して復興を果たそうという「傾斜生産方式」が強力に推進され、炭鉱は活況を呈しました。この頃、NHKでは夜のゴールデンタイムにラジオ番組「炭鉱に送る夕」が放送され、炭鉱の出炭量が国民の関心事であったことが窺えます。

この時期には、復興金融公庫の融資によって再び新鉱開発が活発化し、北炭では平和二坑（夕張市）、清水沢（夕張市）、角田（栗山町）、穂別（穂別町）、三笠山（三笠市、途中で開発中止となりましたが後に北炭幌内立坑として活用）が、三井鉱山では三井芦別二坑（芦別市頼城）、住友石炭では奈井江（奈井江町）が開発されました。三菱鉱業では芦別（芦別市、樺太からの引き揚げ者を収容する目的がありました）が開発され、日東茶志内炭鉱を系列下に収めました。

しかし、これら戦後に開発された炭鉱は、終戦直後の石炭増産要請に対応して開発されたものの、経営条件が劣ったものが多くありました。

さらに、1949(昭和24)年にGHQ経済顧問として来日したドッジ（ジョセフ・ドッジ）が勧告したドッジ・ラインによる復興金融の整理縮小の影響を受けると、三井芦別二坑など一部を除いて開発規模の縮小や子会社として分離されるなど、戦後に開発された炭鉱は、短期的な生産を担っただけにすぎませんでした。

### ○エネルギー革命の対抗 — スクラップ・アンド・ビルド

その後、好不況の波を繰り返しながらも、1957(昭和32)年には炭鉱数158（うち石狩炭田で3分の2を占める）と最大数を記録し、1960年前後には機械採炭が本格化するなど生産量も戦前の水準までに回復しました。これが、第二のピークであり、炭鉱が最も繁栄した時代でもあります。

戦後の労働運動によって炭住や福利厚生施設は充実し、スポーツや文化運動は隆盛を極めました。映画は札幌より先に炭鉱の映画館で封切られ、「三種の神器」と言われた白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が道内で最も早く普及したのは炭鉱の家庭でした。

しかし、繁栄は長くは続かず、1960年代に入ると原油の輸入自由化開始となり、石油が急激に普及して、石炭産業は坂道を転げ落ちるように斜陽化します。このような事態にただ手をこまねいていたのではなく、「スクラップ・アンド・ビルド」によって生産性の高い炭鉱への積極的な投資によって生き残りを図りました。

特に重視されたのは、運搬システムの合理化と採炭方式の機械化です。運搬システムでは、伸びきった坑道維持長を短縮するために立坑が掘削されました。この時期に建設された立坑は、幌内・夕張・真谷地・空知（北炭）、三井芦別・三井砂川（三井）、奔別・赤平（住友）、茂尻（雄別）、羽幌（羽幌）などであり、これらの多くは1980年代まで石炭生産を継続する基となりました。

また、採炭機械の合理化では、ホーベル（炭層を崩すカンナのような機械）に続いて、自走枠（シールド枠）とドラムカッターの組み合わせによるSD採炭が代表的なものです。

このような合理化の結果、1960年代には全道出炭量は2000万トンを超え、第三のピークを迎えました。なかでも、炭質が良く埋蔵量も豊富であった石狩炭田は、それまで日本最大であった筑豊炭田の生産量を抜き、わが国最大の産炭地としての地位を不動のものにしました。

#### ○斜陽による生産集約と終焉

しかし、1970年代に入ると、中東・アフリカで大油田が発見され、石油が大量に安く供給されるようになり、また、液体であるため輸送や貯蔵が石炭より便利であることから、もはや石油に対抗できないことが決定的となり、4つのエリア（①空知北部／住友赤平・三井芦別・空知・三井砂川、②空知中部／北炭幌内、③空知南部／北炭夕張新・三菱南大夕張・北炭真谷地、④釧路／太平洋）に生産を集約し、1000万トンの生産量を維持しました。

1980年代に入ると、生き残った炭鉱も段階的に閉山し、およそ120年間にわたり、北海道の発展を牽引してきた空知の坑内掘り炭鉱は、1995(平成7)年の空知炭鉱閉山により姿を消しました。現在は釧路コールマイン（釧路市、旧太平洋炭鉱）で限定的な坑内採炭が行われているに過ぎません。

### ■閉山後から現在、そして『炭鉱（やま）の記憶』

#### ○閉山の影響

炭鉱によって街ができた産炭地域では、基幹産業の石炭産業が崩壊すると、夕張市にみられるように経済・社会的な困難が一気に噴出しました。

人口は最盛期の半分以下となり、高齢化率（65歳以上の人口比率）は40%を超えています。1960年代に炭鉱が閉山した他の国内産炭地と異なり、北海道では1980年代まで石炭生産が続いていたことによって、炭鉱なき後の地域振興は、過去のものではなく未だ現実的な問題とあると言えます。

○『炭鉱（やま）の記憶』

産炭地域の多くの市町では、外部からの企業誘致やテーマパークなど、地域の歴史的な文脈に背を向けたものが多く、成果を挙げるに至りませんでした。

そこで近年、注目をされているのが、炭鉱遺産や固有の生活文化という『炭鉱（やま）の記憶』を手がかりにした地域再生に向けた市民の動きです。

新千歳空港から見える森は、かつて坑木用として植林されたものだったりするなど、私たちの身近なところに『炭鉱（やま）の記憶』は存在しています。鉄道網、テレビ局、新千歳空港の滑走路、札幌のタクシー会社…など、今日の便利な生活は、石炭産業によってつくられた基盤によって支えられているのです。

また、炭鉱で使われた技術は、当時の最先端技術であったばかりでなく、今の時代にもその技術が様々なところで活用されています。例えば、石炭を掘る技術をトンネル掘削に活かしたり、地下の坑道へ鉱員を運ぶための高速エレベーターの技術が、現在の高層建築のエレベーターに活かされたりしています。

このように長く日本の産業の発展に大きく寄与している炭鉱を、空知地域が支えてきたという誇りを胸に郷土愛を育むことが、地域づくりに繋がるのです。

『炭鉱（やま）の記憶』は、炭鉱なき後も私たちの暮らしの中に息づいています。その意味と価値をもう一度問い直す動きを通じて、混迷を深める日本の未来にとっての教訓とヒントを得ることができるのです。

## (2) 美唄市の歴史『炭鉱(やま)の記憶』

### 【明治】

- 6年(1873) アメリカ人地質学者ベンジャミン・スミス・ライマンが地質、鉱物資源の調査がはじまる。その後、明治9年に地下資源の状況を世に紹介
- 14年(1881) 全国で3番目、道内で最初の集治監「樺戸集治監」が現在の月形町に開設
- 15年(1882) 現在の三笠市市来知村に空知集治監が開設、幌内鉄道全線が開通
- 19年(1886) 5月 市来知一忠別太間(現在の旭川市)上川仮道路着手し8月に開通、翌日から樺戸集治監分担区間工事着手、翌年20年8月に完成
- 20年(1887) 樺戸道路が開通し道庁によって石狩川に渡舟が設置された  
・・・沼貝村開村後 明治23年(1890)～
- 23年(1890) 岩見沢一歌志内(空知線)の鉄道工事が完成、翌年北炭鉄道空知線開通  
上川道路築造工事全線完成、屯田兵特科隊(騎兵隊・砲兵隊・工兵隊)設置、美唄駅開業)、岩見沢一歌志内間の5駅を結ぶ電話線架設電話線完成
- 24年(1891) 市来知・幌内・幾春別・沼貝各村および夕張郡戸長(こちょう)役場の管轄に属する
- 25年(1892) 峰延2号川に道内最初の溜池完成
- 26年(1893) 松平(葵)農場(20戸)中村農場(19戸)、富樫農場(25戸)など沼貝村に入植  
高島農業開設、同年神山惣佐衛門らにより道内最初の溜池完成
- 28年(1895) 沼貝戸長役場独立開庁、戸数1,010戸、人口4,842人
- 31年(1898) 石狩川洪水で中村地区全戸浸水
- 33年(1900) 宮浦喜太郎が郷里から獅子舞の道具を取り寄せ若連中に教える(峰延獅子舞)
- 34年(1901) 屯田兵全員が後備役になり、各隊が解散になる
- 35年(1902) 美唄川上流に第一水利組合用水路完成、市街地に初めての劇場、大福座ができる
- 36年(1903) 七共・第一の両水利組合の用水路が完成
- 40年(1907) 美唄市街大火(22棟20戸焼失)
- 41年(1908) 石狩石炭(株)が美唄炭田の本格開発のための専用鉄道の建設に着手(大正3年に開業)
- 42年(1909) 1級町村制施行、同年末戸数2,108戸、人口12,548人

### 【大正】

- 2年(1913) 徳田炭鉱開抗(のちの新美唄炭鉱)飯田美唄炭鉱の第1抗の開抗
- 3年(1914) 美唄鉄道が三菱の手に収まる、美唄軽便鉄道が開通し、沼貝駅と我路駅が開業
- 4年(1915) 三菱合資会社、飯田美唄炭鉱を買収し三菱美唄炭鉱となる。徳田炭鉱が新美唄炭鉱と改称、以後沼貝、錦旗、市川、上村、光珠中小炭鉱開抗
- 5年(1916) 美唄炭山郵便局が我路市街に開設、のちの我路郵便局
- 6年(1917) 美唄電灯の設立により、美唄市街地の我路市街地にも電灯が灯る  
三菱クラブ美唄スキー場が設立、三菱美唄炭鉱で朝鮮人従業員124人が入山
- 7年(1918) 我路に新設の我路小学校が開校、このころから峰延地区で傘踊りが始められる
- 8年(1919) 現農林水産省北海道農業試験場農芸科学部泥炭研究室が設立される  
番町が丘スキー場にヒュッテが新設され、翌、年日本で最初の夜間照明練習場が設置  
大正12年にはジャンプ台も完成
- 9年(1920) 第7回道会議員選挙で岡田春夫が当選、三菱美唄炭鉱病院の新病院完成、大富士功組合設立、常磐小学校開設  
第1回国勢調査、6,409世帯・人口32,321人で全国最大の村となる
- 11年(1922) 北海土功組合設立、美唄停車場の駅舎と美唄鉄道と全面共同使用になる、美唄川の石狩川に通ずる放水路開通

- 14年(1925) 町制施行により沼貝町となり、翌年美唄町と改称する、光珠内に隕石落下  
 15年(1926) 三菱美唄炭鉱業用地内に宮ノ下郵便局開設(にちの美唄炭山郵便局)  
 町名を美唄町と改称

## 【昭和】

- 2年(1927) 三菱美唄炭で美唄最初の朝鮮人労働者の争議が発生  
 三菱美唄炭の竖坑でガス爆発発生(死者39人)
- 3年(1928) 茶志内地区で初めて郵便取扱所設置(のちの茶志内郵便局)、光珠炭鉱の経営が三井  
 鉱山(株)に移り三井美唄炭鉱発足、茶志内炭鉱が休山、北海土功かんがい溝完成
- 4年(1929) 美唄駅と三井美唄炭間の鉄道線路工事着手  
 美唄炭山我路4条通りから出火、204戸を焼失
- 6年(1931) 石炭輸送専用の南美唄駅設置、茶志内炭鉱が開鉱し、以後3年間採掘する、大富士功組  
 合揚水が旧来の蒸気機関から電化に更新、我路市街大火(76戸焼失)
- 12年(1937) 日東美唄炭鉱(元の茶志内炭鉱鉱区)開坑  
 美唄市街で大火、372戸が焼失(美唄大火)
- 13年(1938) 朝鮮人労働者の強制連行始まる
- 16年(1941) 太平洋戦争開戦、三菱美唄炭鉱通洞坑でガス爆発事故(死者・行方不明者177人、負  
 傷者22人)
- 17年(1942) 三菱、三井両炭鉱に勤労報国隊が入山
- 18年(1943) 石狩川美唄川大洪水(死者30人、流失家屋58戸)
- 19年(1944) 三菱美唄炭鉱竖坑でガス爆発事故(死者109人)  
 炭鉱の中国人労働者強制連行開始
- 20年(1945) 6月 函館俘虜収容所(本所)三井美唄炭鉱に設置(396人)、8月15日正午のラジ  
 オで敗戦の報道、その後外国人労働者帰国、日東炭鉱で戦後初めてのストライキ、三菱  
 美唄炭「双十節事件」起こる  
 戦前1日500トンを出炭した三菱美唄炭で350トンに、同じく300トンを超えた  
 三井美唄炭でも200トンに急落、各炭鉱に労働組合結成  
 12月三井美唄炭で全国初の炭鉱生産管理闘争
- 21年(1946) 三菱美唄炭で「人民裁判事件」発生、日東美唄炭「軽音楽事件」が起こる
- 23年(1948) 従業員が三菱美唄炭で7,800人 三井美唄炭でも4,400人と戦後最多  
 上村炭鉱が上村炭業株式会社に組織を改め、三菱美唄炭の支鉱日東美唄炭も新しく  
 通洞坑の開発にともない三菱美唄茶志内炭業所として独立
- 25年(1950) 市制施行により道内15番目の市として美唄市誕生、レット・バージによって美唄では  
 炭鉱関係72人が解雇
- 26年(1951) 三菱美唄炭で年度100万トン、三井美唄炭でも80万トンを突破、戦後最高水準
- 28年(1953) 三井美唄炭で合理化反対闘争が始まる(113日の闘い)
- 29年(1954) 農家戸数がこれまで最高の2636戸に、この年の市内の人口が9万1431人  
 (1万7070世帯)を数える
- 31年(1956) 美唄市人口ピーク 9万2150人 1万7139世帯
- 35年(1960) 「炭鉱に生きる」が岩波書店から刊行
- 38年(1963) 市長が美唄市議会で非常事態宣言を表明(石炭危機打開)三井美唄炭閉山  
 大舟産業美唄炭業所が閉山、東明公園開園(市の失対事業による開発)
- 40年(1965) 三菱美唄炭が美唄炭になる 九州鉱山東美唄炭業所が閉山
- 41年(1966) 三井炭業美唄炭業所閉山
- 42年(1967) 三菱茶志内炭が閉山し同時に専用鉄道廃止、上村炭鉱閉山

- 43年（1968） 三菱美唄鉱でガス爆発事故（死者16人、負傷者4人）（山はね事故、坑内火災が発生（死者13人、負傷者6人））
- 46年（1971） 本格的な米作に生産調整を実施し対策始まる、美唄炭鉱と三菱大夕張鉱が合併する  
開拓記念厚生会館（東明閣）開館
- 47年（1972） 三菱大夕張炭鉱美唄鉱業所閉山、美唄鉄道の鉄道部門が廃止
- 48年（1973） 三美炭鉱、北菱我路炭鉱閉山し市内の坑内作業を伴う炭鉱は全て閉山、美唄から南美唄間の石炭輸送は廃止（旅客郵送は昭和46年停止）
- 50年（1975） 市役所庁舎落成、美唄国設スキー場が東美唄町に建設され、供用開始（レストハウスが翌年オープン）
- 51年（1976） 光珠内隕石が市の文化財に指定
- 52年（1977） 三菱美唄記念館が東美唄町に開館、我路ファミリー公園開園
- 55年（1980） 炭山の碑が建立される（作者・安田侃）
- 56年（1981） 美唄市郷土史料館が開館・健康センター開館
- 61年（1986） 三菱美唄鉱業南大夕張鉱業所も常盤台地区で露天掘を始める

## 【平成】

- 4年（1992） アルテピアッツァ美唄開設（旧栄小学校校舎）
- 12年（2001） 市の鳥が「マガン」に決定
- 13年（2002） 8月 旧三井美唄小学校跡地が南美唄公園として開園
- 14年（2002） 宮島沼がラムサール条約湿地に登録
- 16年（2004） 体験交流施設「体験交流間館」オープン
- 17年（2005） 美唄市パークゴルフ場オープン、体験施設「登り窯」完成
- 18年（2006） 美唄産「おぼろづき」が全国お米コンクールで北海道米初の金賞受賞
- 21年（2009） 7月 アンテナショップPiPaオープン
- 22年（2010） 宮島沼水鳥・湿地センター入館者10万人達成
- 23年（2011） 美唄市と浦臼町を結ぶ「美浦大橋」開通
- 24年（2012） 宮島沼のラムサール条約登録から10周年
- 25年（2013） 3月西美唄保育園、三井美唄幼稚園と三井美唄保育所閉園・閉所



### (3) 美唄市の概要

#### ○美唄市の特徴

美唄市は、石狩平野のほぼ中央に位置し、市内を南北に国道12号線と函館本線が平行して縦貫しています。

地形層相は、国道12号線を境に東西に分かれ、石狩川東岸沿いに発達した石狩平野である西部には、石狩川の河跡湖（かせきこ）群である湖沼が点在するほか、泥炭と呼ばれる寒冷地特有の湿地帯が多くありますが、土地改良事業、かんがい事業を行い、今では国内有数の穀物地帯であり、空知を代表する田園地帯となっています。

東部は、夕張山地に続く丘陵・山岳地帯で、かつては石狩炭田の一部で豊富な石炭を産出し、道内有数の採炭地でした。

市街地は、国道12号線沿いを中心に発展した地域と、炭鉱により発展した旧市街地が点在しています。石狩川河跡湖群の一つである宮島沼はマガンの飛来地として知られ、ラムサール条約登録湿地となっています。

美唄市のみならず北海道内陸部の開拓は、上川道路（現在の国道12号線）の開通によって可能になったと言っても過言ではありません。樺戸（月形）集治監（刑務所）空知（三笠）集治監（刑務所）の囚人によって開さくされました。

その予定地は沼地や泥炭地だったため、囚人たちは腰や首まで水に浸かり排水溝を掘り、路面に丸太や土砂を敷き詰めながらの作業だったため工事は難航しましたが、1886（明治19）年8月20日に完成しました。

その翌日、両集治監の囚人を有効に使役出来るよう樺戸道路（現在の道道月形峰延線）の開さくに着手し囚人たちの外役作業としてさらに過酷な労働を強いることになりました。

しかし、このことによって、北方警備と開拓者として北海道内陸部に屯田兵が入植できるようになり、開拓の基礎を樺戸・空知集治監の囚人が担った功績はとても大きいものでした。

1874（明治7）年に、アメリカ人の地質学者B・S・ライマンが、ビバイ媒田（炭田）測量調査（8年まで）を行いました。開発は明治20年代以降とずれ込みました。その後、1906（明治39）年に一の沢※1上流に元美唄炭鉱が開坑し、やがて美唄川上流には掘出された石炭を輸送するために鉄道も敷設されました。

※1 徳田が「元美唄炭鉱」を開坑した南美唄町「一の沢」と、三菱地区の東美唄町「一の沢」（正確には「北一の沢」）は別地域。

美唄市の農業開拓は、1886（明治19）年 空知集治監の作業指導員が二号川沿いで米作りを志したことに始まり、1894（明治26）年峰延二号川溜池が完成、北海道溜池発祥の地として現在も水をかんがいでいます。北海幹線用水路は、赤平市から南幌町まで役80Kmに及び用水路、農業専用としては日本一長く、空知平野の水田を潤す水を供給しています。用水路のほぼ中央に位置する美唄市は、光珠内溜池では豊水期の余剰な水を利用し不足分を調整池から北海幹線用水路へと供給しています。

## ○美唄市の誕生

美唄という地名は、アイヌ語で「カラス貝の多く棲む沼」を意味する「ピバ（あるいは「ピバ」・「ビバ」：カラス貝（川真珠貝））・オ（多い）・イ（沼）」が語源とされています。1886（明治19）年8月、上川仮道路が開通するとことで札幌方面から美唄への交通が可能になり、1890（明治23）年に沼貝村が開村されました。1891（明治24）年7月5日には（北炭鉄道空知線 現JR函館本線の一部）岩見沢―歌志内間の鉄道が開業、同年、光珠内・美唄・茶志内に屯田兵とその家族100戸が入植し、以降1894（明治27）年までに毎年100戸ずつ沼貝村へ入植しました。その後、1925（大正14）年には町制施行によって沼貝町に昇格し、1926（大正15）年に町名を変更して美唄町に改称、1950年（昭和25）年に市制施行により北海道で15番目の市となりました。

## ○地質調査と道路の開通

1874（明治7）年に、アメリカ人の地質学者B・S・ライマンが、ビバイ煤田（炭田）測量調査（8年まで）が行われ、1876（明治9）年5月「日本蝦夷地質要略之図」が発行され、美唄煤田（炭田）が華やかに登場しました。しかし、ビバイ炭田の開発は1887（明治20）年代以降にずれ込みました。

上川道路の計画発注者は、1886（明治19）年に設置されたばかりの北海道庁でした。最初にかかれたのは、仮の道路、通称「上川仮道路」と言い、工事は同年の5月19日、市来知村（いちきしり）（現・三笠市一部）と忠別太（旭川市）を結ぶおよそ92キロメートルの区間で、仮道といっても樹木を伐採し、笹を刈り、全行程のうち168箇所もの土橋を架けるといって難工事でしたが一応の完成は8月20日のことでした。

集治監署員に率いられた囚人50人によって、空知川の北岸から着工して、まず旭川に向けて工事が進められ、今度は空知川の南岸から美唄川へ向けて工事を着工。道路幅およそ2メートルの刈り分け道でした。

過酷な作業は、囚人達を悩ませました。昼夜を問わぬ無数の蚊やブヨの襲来、クマやオオカミに怯え、満足に食事を与えられない過酷な大工事は、正確な記録も残されないほどの死者をだしたといわれています。

峰延からみると樺戸道路、樺戸郡からは峰延道路または市来知（いちきしり）道路と呼んでいましたが、正式には「樺戸空知間新道」といい現在の道道月形峰延線です。その目的は空知・樺戸集治監を結び、双方の囚人を有効に使役することが目的でした。工事は二つに分けて行われました。峰延―月形間はほぼ直線ながら多くの沼地が点在する低湿地帯をつらぬき、市来知と峰延間は達布山の山腹をめぐる溪谷を渡るなど、二つのコースは地形の上でいずれも困難な条件を備えていました。

市来知と峰延間は、1886（明治19）年8月21日、つまり上川仮道路完成後の翌日に樺戸集治監の囚人たちで着工し、翌年の1887（明治20）年8月20日に一応完成しました。峰延と月形間は、空知集治監の囚人たちによって1887（明治20）年5月15日に着工し、同年の1887（明治20）年9月3日に完成しました。

## ○「樺戸集治監」の創設

樺戸集治監は、明治維新の動乱（佐賀の乱、熊本の神風連の乱、福岡の秋月の乱、山口の萩の乱、西南の役など）全国各地で起きた多数の国事犯・重罪人を収容する施設を早急に整備する必要に迫られた明治政府は、当時未開の地であった「北海道」を流刑地として候補に挙げ、1880（明治13）年に内務省から調査団を北海道に派遣しました。

調査の結果、一 石狩川は交通の手段として活用できる。二 裏手には山脈があるので囚人の脱走を阻止できる。三 民家のない密林地帯。四 肥沃な大地があり農耕地として利用できる。との理由で現在の月形町に設置することに決まりました。

1881（明治14）年に、東京、宮城に続き全国で3番目、北海道で最初の集治監「樺戸集治監」明治政府内務省が管轄する国立の監獄が設置され、収容者数1,500人規模の「農事監獄」として始まりました。（年度により監獄署）

1882（明治15）年には、空知集治監が現在の三笠に設置され、1883（明治16）年には三池集治監が九州の大牟田、1886（明治18）年には釧路集治監が現在の標茶町に設置され、全国的に集治監の整備が行われていきました。

道路開さくや橋の建設、水道工事、屯田兵屋の建築など、開拓創業期の先駆的使命を果たしました。

## ○「空知集治監」の創設

空知集治監は、幌内炭鉱の採炭に囚徒を使役することを主な目的とし、1882（明治15）年に市来知村（いちきしり）に設置されました。

当初、囚人297名が収容され、その後獄舎、諸作業場が建築され収容人数は増加し、1890（明治23）年には3,247名にものぼりました。

囚人は炭鉱での労役の他に、道路開さくや橋の建設、水道工事、屯田兵屋の建築など、開拓創業期の先駆的使命を果たしました。

北海道開拓のために、囚徒が血と汗を流したその労苦と功績は忘れてはならないものです。

## ○美唄炭田の初期開発と専用鉄道

1874（明治7）年に、アメリカ人の地質学者B・S・ライマンが、ビバイ媒田（炭田）測量調査（明治8年まで）を行った後、美唄炭田での開発を目指した徳田與三郎がいました。彼は、ライマンの調査地域を中心に試掘し、27年には沼貝村に拠点を定めて、31年には所有鉱区権数は15鉱区、場所は、後の三井美唄炭鉱の鉱区にあたります。その後、資金源の調達が困難になり、徳田鉱区は多くの人手に渡り、東美唄地区に1905（明治39）年、一の沢上流に元美唄炭鉱を開坑しましたが、2年で挫折、盤の沢右岸山麓に徳田炭鉱を開坑し再起を図りました。1914（大正3）年には、近くに美唄軽便鉄道が開通し長年の執念が叶いました。

美唄川上流には、（東美唄地区）開発する意志のない黒柳金二郎が21鉱区、沼貝村の三割に当たる試掘権を所有していました。後に三菱財閥が進出するこの地域に目を付け、当時夕張炭田鉱区権と鉄道網を独占していた北海道鉄道会社（後の北海道炭礦汽船株式会社 以下北炭）に対抗するため開発を志した、浅野財閥の浅野総一郎が、

石狩石炭株式会社を設立し黒柳金二郎と交渉を進めていました。1907（明治40）年には試掘願いを提出し開抗準備を進めていましたが、その一年後突然黒柳との間で訴訟問題が発生し、その後44年に石狩石炭株式が敗訴、以後五年間施設が放置されたままになりました。黒柳金二郎の試掘権は黒柳金二郎の弁護士だった、飯田延太郎の所有となり、1913（大正2）年11月5日に飯田美唄炭鉱を開坑しました。しかし、2年足らずで三菱合資会社を買収されました。

南美唄地区では、1897（明治29）年七号の沢上流に若山炭鉱が開坑、1899（明治32）年に行き詰まり、その後、大正期には錦旗（きんき）炭鉱が開坑されました。美唄町の上流部にあって宝田炭鉱から引きつがれていた日本石油光珠炭鉱を買収して三井美唄炭鉱が発足、わずかに残っていた錦旗炭鉱の鉱区をも吸収しました。三井では直ちに、大通洞坑の開削に着手し、1931（昭和6）年には国鉄美唄駅までの石炭輸送路を完成させ増産体制を整えました。近隣の農地や私有林を買収して炭鉱住宅街を山の上から現在の南美唄町一帯のなだらかな丘陵地に大移動し、碁盤の目に区画して条丁目を設定する近代的な炭鉱住宅街が出現しました。

明治、大正にかけ、今の東美唄地区や南美唄地区ではめまぐるしく開坑が行われ、大正、昭和にかけて、三菱や三井といった大手財閥による大規模な採掘が始まりました。

#### ・三菱鉱業茶志内炭礦専用鉄道・・・・・・・・茶志内地区

美唄市の日本国有鉄道函館本線茶志内駅から、東方の茶志内炭鉱までの2.0Kmを結んでいた三菱鉱業の専用鉄道で、1952（昭和27）年6月12日に、茶志内から茶志内炭鉱間の専用鉄道として開通しました。この鉄道は石炭を運んだだけでなく、通勤・通学客輸送のため、客車の運行も行われていました。

その後、三菱鉱業茶志内炭鉱閉山に伴い、1967（昭和42）年7月1日に廃止されました。

#### ・三菱鉱業美唄鉄道（（1913（大正2）年開通）美唄軽便鉄道）・・東美唄地区

美唄川上流の炭鉱開発にともなう専用鉄道として工事を着工、1907（明治40）年6月のことでした。翌41年には四つの橋梁工事に入り、完成間近の11月になって、鉱区権問題で係争が起こり工事中断、石狩石炭株式会社が係争に敗れ工事が中断しましたが、別の鉱区権を所有していたため、1913（大正2）年に軽便鉄道の認可を取得し、翌3年3月から、5年以上も放置されていた路線の復旧工事から着工し、同年11月5日に美唄から沼貝（後の美唄炭山）間の一般運輸営業を開始しました。

その後、1915（大正4）年4月に三菱合資会社が飯田美唄炭鉱を買収して進出し、次いで美唄鉄道も実質的に三菱に買収、同年9月29日には、美唄鉄道株式会社が設立されました。

その後、三菱鉱業美唄炭礦の業務縮小、合理化対策、二度の災害などに見舞われるなど経営が悪化し同資本系の三菱大夕張炭礦に吸収合併して同社美唄鉱業所となりましたが、1972（昭和47）年に閉山、美唄鉄道線も5月31日に廃止されました。廃止後専業となったバス部門もその後2002（平成14）年に廃業しました。

・国鉄函館本線南美唄線・・・・・南美唄地区

1928（昭和3）年8月1日、昭和不況の影響を受け苦しい運営をしていた日本石油光珠内炭鉱の共同保有及び経営権の一切を、日本の二大財閥の一つである三井（三井鉱山株式会社）に引き継ぎ、三井美唄炭鉱が発足し操業を開始しました。石炭輸送手段として国鉄側に専用線の敷設申請をしていました。1931（昭和6）年11月に敷設工事が竣工、同年12月1日に美唄から三井美唄炭鉱のお膝元である南美唄を結ぶ貨物線の営業を開始しました。その後、石炭需要の高まりとともに周辺人口が増加したことから、1944年（昭和19）年1月15日より旅客営業を開始しました。その後、急速なエネルギー需要の変革により石炭需要が減少、1963年（昭和38）年三井美唄炭鉱が操業停止に追い込まれました。それに伴う利用激減により、1971（昭和46）年8月3日で旅客扱いを廃し、三井美唄炭鉱の子会社である三美鉱業が1973（昭和48）年に閉山したことにあわせ、同年9月9日に貨物営業も廃止され、廃線となりました。

### ○炭鉱のその後（昭和～平成）・・・・・三菱・三井炭鉱関係

1937（昭和12）年に日中戦争が勃発し、1938（昭和13）年に国家総動員法が施行され、「拳国石炭確保運動」など石炭増産運動が興り、「一塊の黒ダイヤ（石炭）は、血の一滴」として増産体制に入りました。

熟練鉱員が戦争に徴兵されたため、朝鮮人労働者や、学校・職場ごとに編成され無償労働として動員される「勤労報国隊」が、その不足を補っていました。

1939（昭和14）年には従業員数2,600人を越え、太平洋戦争後に突入すると16年には三井・新美唄両鉱合わせて従業員4,000人、20年6月には6,000人近い労働者を擁していました。もう一つの大財閥である三菱美唄炭鉱の従業員もまた、1939（昭和14）年には5,000人、20年6月には9,000人を越えました。18年には別に日東美唄炭鉱をも系列下に収め、三菱系2鉱で1万人を越える状況でした。

1944（昭和19）年度の美唄町出炭量は253万トンを超え、同年の全国炭鉱別出炭量をみると、1位が三井三池炭鉱、2位が北炭夕張、3位が三井田川に次いで三菱美唄が4位、三井美唄が9位となっており、上位10炭鉱中に一つの町で二つの炭鉱が入るのは全国で美唄だけでした。

戦後の産業復興の基礎産業として石炭増産が叫ばれ、昭和20年代の中頃までは、炭鉱労務者の充足に重点がおかれまして。

1947（昭和22）年1948（昭和23）年は、経済安定本部石炭局の生産計画により、各炭鉱に出炭量が割り当てられ、産出量は増大していきました。

しかし、その後の石炭統制の撤廃による安定経済への移行や、企業の合理化による余剰人員の整理、採炭の機械化などにより、従業員数は減少していきました。

1960年代の原油の輸入自由化によって石炭産業は斜陽化し、「スクラップ・アンド・ビルド」による生産性の高い炭鉱への集約や積極的な投資によって生き残りを図りました。

しかし、石炭から石油への転換というエネルギー革命や合理化により、1952（昭和27）年には一次エネルギーの供給量で、49.5%を占めていた国内炭のシェア

は次第に低下し1960年には国内炭32.2%に対して石油36.0%となり、シェアが逆転しました、安価な輸入炭の増加がさらに国内炭のシェアの低下をもたらすことになり炭鉱を経営する各社では合理化を余儀なくされました。炭鉱労働者の数も次第に減少し、さらに1963(昭和38)年には三井美唄炭鉱が閉山、1973(昭和48)年に三菱美唄我路炭鉱の閉山をもって美唄市内の炭鉱はすべての坑口を閉ざし多くの人々が故郷を離れていきました。

いまは残された炭鉱施設の一部が、北海道産業遺産としてかつて近代日本を支えた歴史を静かに物語っています。

#### ○未墾地開拓から戦後開拓(農業関連)

1909(明治42)年に4千6百ヘクタールの沼貝村の総耕地面積は1923(大正12)年7千4百ヘクタールに達していましたが、上美唄原野区画地といわれた地域を中心に広大な未墾地が広がっていました。深い泥炭地で、道路整備されていない状況でした。

美唄町となった1926(大正15)年9月、北海道庁の「私有未墾地開発資金貸付規定」によって入植が促進されていきました。1929(昭和4)年4月に福島県から18戸が現在の光珠内町西方原野に入植、福島団体と名乗りました。長年に渡り放置されていた未墾地は、深い泥炭湿地の土地改良などに多くの労力を強いられ、昭和初期に入っても開墾は困難を極めました。開拓の苦労は明治期と変わりませんでした。それでも、入植者の増加や、開墾の進展により1938(昭和13)年になると、町内の農業戸数は2062戸に増加し、総耕地面積も1万ヘクタールを突破しました。耕地内訳は(田)5千7百ヘクタール、(畑)4千8百ヘクタールでした。後に第二次世界大戦後の戦後開拓へと引きつがれていきました。戦後開拓基幹産業の一つであった炭鉱の閉山をきっかけに、農業、商工観光業が発展していきました。